

第10課 芸術や科学における教育

【暗唱聖句】

「天は神の栄光を物語り大空は御手の業を示す」詩篇 19:2

【日曜日・主のみ】

「世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。従って、彼らには弁解の余地がありません」ローマ 1:20

神様が創造された自然には神様の永遠の力と神性が現れており、これを通して神様を知ることができると聖書は教えています。自然を見て人間は深く感動します。自然の中には人間が生きるために必要なすべてものが備わっています。心を楽しませたり癒したりもします。それらは偶然ではなく、神様が人間のために造られたからです。それを私たちは感じ取り、そこから神様を知り、学ぶことができます。まさに自然は神様を学ぶ教科書であり、それは誰にでも平等に与えられており、それゆえパウロは神様を信じようとしないう者たちに対して弁解の余地はないとさえ言うほどです。詩篇も「天は神の栄光を物語り大空は御手の業を示す」（詩篇 19:2）と謳っています。世俗の教育は、神様はいないということを前提に行われていますが、真の教育は神様抜きにはあり得ません。

【月曜日・聖なる輝き】

「聖なる輝きに満ちる主にひれ伏せ。全地よ、御前におののけ」詩篇 96:9

神様は聖なる輝きに満ちています。神様には闇が一切ありません。闇の中（この世）に生きている私たちは、そこが闇だからこそ光を見出すことができ、光の主に向かってひれ伏し拝むことができます。神様の聖なる輝きは、神様の美しさを表現している言葉でもあります。自然の美しさや荘厳さ、あるいは神秘さは、それを創造された神様の栄光を反映しています。自然は神様の御手の業であり、神様の栄光が反映されているために、思わず手を合わせたくなる人がいるのも無理はないのですが、自然は神様ではないので拝む対象ではないのですが、自然から神様を愛と栄光を感じ取り、神様に目を向けることができます。

「女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた」創世記 3:6

エデンの園には食べてはならない木の実がありましたが、それは見た目にはいかにもおいしそうで、目を惹きつけ、賢くなるように見えました。しかし、それは食べてはならないものでした。これと同様に、目で見て美しいものが常に良いとは限らないという点は、きちんと教える必要があります。見た目で判断するのではなく、聖書の御言葉から判断しなければならないということです。

【火曜日・間違った教えの専門家】

「金持ちになろうとする者は、誘惑、畏、無分別で有害なさまざまの欲望に陥ります。その欲望が、人を滅亡と破滅に陥れます。金銭の欲は、すべての悪の根です。金銭を追い求めるうちに信仰から迷い出て、さまざまのひどい苦しみに突き刺された者もいます」第一テモテ 6:9、10

聖俗的な教育の目的の一つに、経済的な意味での人生の成功があるかもしれません。そのために様々な知識や知恵を授けるわけです。しかしながら、金銭を愛することを教える教育は聖書的ではありません。金銭を追い求めるようになる、信仰から迷い出る可能性があるからだと言います。神様の祝福として経済的な祝福があるのは

問題ありませんが、それを追い求める生き方は要注意です。

「不当にも知識と呼ばれている反対論とを避けなさい」(第一テモテ 6:20)

また、聖書に書かれていないことをいかにも正しい知識として言う人たちがいつの時代にもいるものです。聖書の教えに明らかに反する考えや意見を避けなさいと教えられています。「その知識を鼻にかけ、信仰の道を踏み外」(第一テモテ 6:21) するかもしれないからです。どちらが正しいのかということ議論することも、不毛な議論となりやすいです。

【水曜日・愚かさを知恵】

「主を畏れることは知恵の初め。無知な者は知恵をも論しをも侮る」箴言 1:7

芸術や科学は、素晴らしい神様の栄光となる反面、自分の栄光となる誘惑が常にあります。一例を挙げると、音楽は神様への賛美、神様への栄光になると共に、自分の栄光ともなりえます。化学の発展は生活の質を上げ、多くの素晴らしいものをもたらした反面、大量破壊兵器のような恐ろしいものも生まれました。大量破壊兵器が生まれることが分かっているながら、科学者はその研究を続けたいという誘惑に勝つことができませんでした。このような誘惑に打ち勝つためにはどうしたら良いのでしょうか。聖書は主を畏れることから始めよと教えています。主を畏れることは知恵の初めです。逆に神様を畏れぬ者は無知であり、神様の知恵も論しも侮ります。

【木曜日・ヨブに答えられた主】

「主は嵐の中からヨブに答えて仰せになった。これは何者か。知識もないのに、言葉を重ねて神の経綸を暗くするのは。男らしく、腰に帯をせよ。わたしはお前に尋ねる、わたしに答えてみよ。わたしが大地を据えたとき、お前はどこにいたのか。知っていたというなら理解していることを言ってみよ」ヨブ 38:1~4

この世界は一定の法則に従って休むことなく動き続けています。この世界を創造し、支え、寸分の狂いなく動かしているのは神様です。同様に、神様は私たちが創造し、支え、寸分の狂いなく導いておられます。しかし多くの人は世界は偶然に生じ、偶然に動いていると教える科学を信じています。その結果、私たち自身も偶然誕生し、支え導いて下さる神様の存在を知らずに生きています。そのため試練が臨むとき、恐れに捕らわれ、理解できず、神様に文句さえ言うのです。信仰者ヨブでさえ、試練の中で神様に不平をもらしました。すると、主なる神は嵐の中からヨブに答えるのです。それは「これは何者か。知識もないのに、言葉を重ねて神の経綸を暗くするのは。男らしく、腰に帯をせよ」ということでした。神様はヨブに対して何も分かっていない。正しい知識がないと言います。そのような状態で神様に不平を言うのは、「神の経綸を暗くする」ことだと言われました。神の経綸とは、神様がこの世界を治め導くやり方という意味です。そして、神様は「わたしが大地を据えたとき、お前はどこにいたのか。知っていたというなら理解していることを言ってみよ」と、神様がなさる業の一つ一つに対して、お前はどこまで理解しているのかと問うのです。ヨブは全く理解していないことに気づかされます。そして、自分の身に起こることもそれと同様なのだと悟るのです。

この世の知識は、人生の様々な問題に対する答えを与えてはくれないことがあまりにも多いのです。だから人は悩みます。答えを知っている方は神様だけです。だから、神様を畏れることが知恵の始まりとなるのです。